特別
へ13
4203
15

六
新

風月袋 春告鳥 巻之十五

江戸　為永春水著

第九回

家に入時より家の深衣着くだ春の公の傳ふして
再び流れ出ん時より家の深衣着くだ春の公の傳ふして
ぬ月毋ハ前後の思案もなく黄ざめ気づかぬ家の子なのこと
私ハ子ハ世の間郷ら自然とものつまとる糸の結ま
かゝる千風情　右一節ハ他人のとと紙せゝり出して

昭和八年四月三日
神保五彌氏寄贈
58 2847

ちまち〳〵せるのゞおとゝさまゞわれ〳〵「アレサ　ちがゝやうでゞ
ゞる　ち「どざいませんゞ何ぢ〳〵と云のゞ〳〵「ナニ何ぢも
ませんゞそれゞ方ハ　ゞお弟さんを　ゞ〳〵ってありませんの
と　ゞ〳〵ちゞ　ゞ　ち「そもゝの　ゞ伝切る　ゞ　ゞ「アレサ
ゞ　ゞ　ゞ　ち　ゞ　ゞ　ゞ

でもあなたはまつしるみ　何様お業しでて　おそばに知まつアーき
せんヨ　たへナシノ　何様お出かけ　長くて　先のうち　笠が来まる
めうる　むへまくうちくに　ロかでハ子私ゐと　紙を作けれど
則お茶さんも　公の中でハ　重くおもくおもさるのサ
そまをハ遠ひございますまいる　たへナシノお茶が古者でハあるま
いくく　何様くて　私の公のうちが知まるめうる　むへイ工古
者でなくつるも　私ハ来まますハ　たへイヤとまハおりろい
まるくる　私が悪く長る　寝が生がそまが知まるなるバ

ゆそ　どうん　悪く出発　むへアくし知まますと　則お屋敷のみちのさんの
ございまも　たへヲ　出様らのと　古者ございけや　ゆるいそま
でハかくも　悪くハ不為ヨ　そして私が拝悪く長る　寝と云ハ
誠の英業宿屋ごアル　むへヨヤ　みるさんも　まくく英業とも
何とも　たくく私の　ゆの山艶色ごやり　生ませんうこ　ゆにまと
お茶さんゲこと私ハ　物くおもる生のうち　くいお方がわらうとハ
何様も　たへ知まるのといふの　子私ゐ易考がるめり　むへイヤ
知まくくハアル　たへ知まるる　むへヲ　おくこ　せまこ

あい様へ　様考ゞく看なくッてハトいひく完成ゝ
の白紙　詠めるこゝ毛数のうゝハしさ花のにおを月の眉宣よ
り白きこ袴元ホほうまかくそー恵繋もおもひ死ありくわゞ
やうホ雪け海紫柳の面も不及艶の浮田猫こんとうまう
ぢうり　皆財ハ男も言葉ゝうりーゞ　ハ様ゞる大ゝう
ゝまづゝこい考ゝ様ゞまトいゝゞ　ハ美ひゝゞう　ハそれでハる
アウお花さんで言葉ます　ハナニ大遠ひゝ　お花さん
ゝ美葉けまでも様ゞハるいハナそーゝ　様様さんとうゞ　ホ

れ　様ゝ　様そうゞのホ　様様もゝ様さんゝハ命も様ゝゝゞ
といゝうゝゝゝ　他人ゞ何ゝ　言ゝもゝまゝうゝハる　私の様
て様る　様ハ　お花さんよりも　様さ　欲頁ゞ　様ゝうゝゝいゝゞう
ゝ様様ゝでも不及とうも　様ゝまゝハョ　ハそまでハ何様も私
ハ様ゝませんョ　様様言ゝ　お笑せ様ます　ハイ　ゝ　止
せう　様ゝも　出来ゝハ　お様ゞう　ハヤ　ゝゞでゞハん
ハゝゝゝゝでとゝ　ハ様ゞ　ハ様ゝ　ハ様ゝ　ハ様ゝ
ハゝ何ゝのも様ゝ様ゝゝゞ　様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ様ゝ

といふものハ申しそうもあへなくてござへまするゆゑ何でも
お前さんとみやさんとこの様ごと宜ござへますれハ相
物でお立ち成うゝ　ち　私サ　お前と比丘尼へ参度
来て成さ様さんとやうの様ごとまことに御ゝ相物ごゝう
況ハるゝハのサト　訴ゑるとぢゝそいつゝ様ハおゝ　元禄
寛く　ヨヤく　何時私が様さんを宜といひまゝゝ
何時立様ゝ様ゝト　繰ゝすゝく向ゝ　ゝ
うゝゝらゝけ　ち　いつゝぐもサ　私ハ笑まゝゝゝ

ヨ　ゝ様ゝ　ナニ様ゝ　如彼　お人成ゝ　ち　様人ゝ
お　様ゝ　ゝ　宜ござへます　何ゝ
様ゝ　様ゝ　ハト　繰ゝ　神を　虚ゝ
引ゝ　姿ゝゝく　推ゝ
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ
上様　ヨ　サア　ゝゝ　ゝ　ゝ
風情　ゝ　様ゝ　ハ　ゝ　様用
さん　お中ゝ　男　元来　ヨ

此女の面解は
次の章

敷むく、矣、葉、柿と、掘の一枝ゝ咲くるやうゝ其姿拙
き筆ゝ書ける歌一

そもゝ中昔男ゝの流行する時、美人、年の頃
ゝ金成りしあひ一男、恋ゝ文、玉つくゝるゝ
美人、二八の乙女、まさる艶色自然ゝ俗ゝ
俗の方ゝやうゝる女、者もあり、今ゝ出ゝ記
ゝる方ゝ逆もの、ひるゝよゝ情合をおも
ゝ筆力の不足、看官の心ゝ補ひ、ゝんを願ふ

たゝ一人、美長、級おゝ、ゝ上ゝう、玉アアサ、お止まれ、ゝゝ、たゝ
そんゝゝ、美ぐゝ、ゝゝ、ゝ下ゝ、一人でお遊びゝ、ゝ
のゝ、たゝ二、香ゝ、ゝ、ゝんけまでも、師匠さんゝ、ゝ
ゝゝ、たゝ二、お鮫さんゝ、ゝゝ、ゝゝ、ゝ、同衣で、
んで、居ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、玉ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

たゝ〳〵そく実ゞ
よさまるのゞハる　たゝナニ　雅ゞか嵐さんを引く麻ゝ仕手也
めゝ　たゝそまゞくも　お嵐るんでも　和紙ゝ麻ふするゞ
あいゝく　たゝアレマア　嵐極ゞ　たゝナニゝもゝるめゝ
今ゞ人成きゝく　長ゝく　ゞ長紙おゝしゝあゞ
ゝとゝのと　紙ゝ　逆ゝゞ　たゝいゝく　化ゝ　和紙　れんで
サアといゝと　ゞゞとゝの　則　和紙ゝ麻ふするのゞよ
たゝまゝ　そまゞ　たゝアレ　たゝ　ゞ紙すゝ　極和在

お　ひのゝく　たゝイエ　ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝ
たゝ　ゝゝゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ
きんの　ゝかゝりませんゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ
ひゝゝゝ　ゝゝ　和紙　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
解ゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ　たゝ
ゝゝゝゝ　ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
たゝナヤ　何ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
二条の院の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ヤ
えゝ若るの辻右ぎ　玉ハアレサそまぐゝ判断の兵衛ゆうが恋へ
ぢゝぐざいませんゥ若旦那もお兼さんの移る料理を鮮る見ぐば拓
くゝといふ気ぐぐざいませうゝ　右ハるゝゝゝどさすぐふ掃里さん
のお狩ぢぐみ　有くゝもめまるへ私へ　玉ハナヤ〳〵　私ハいけ
あいるゝ兵衛　仕ます〳〵ヨ。コラ　書紙仕移ふ折く仕ます〳〵
ふハ　右ハナヤ　ゆんみ大書ごる　右ゝ〳〵　難甲ぐゝゝ家モ
玉の所ゝ〳〵　絵ぐ　右ゝ〳〵　仕るのヨ　玉ハナニ　彩るも　慣くゝご
ざいませんゥ。モシ　狩とさん　ヨ　笑まるゝと　国ゝまモ　あのをト

すと　玉ハ　国ゝ　風ハ　さすぐふ　源宮ゝ中ゝゝゝゝとゝふ　極ゝふ
わゝゝねど　ゝゝ　ゝ　ゝ　

何しこそるでも和主こく四郎こるみさんの主こそ大変でございます
たへ何程しそく為でも本宅へ帰らまる対分でも色したこ
ゆらまるる程るるるが万一あつくも お花のるのハ 四人工何れ片付て
も私の程るるものが指種お側よ居るゆうまハるるるいとたじ
めるる 和つく居ても今さるそれが越しうございますハトいひて
源氏ちるく徒よめるまく情と源氏法く形しもれ指よ
のくるるとどるるくとはるる笑く 飛退く二人階子の陰よ
てお銭の契 主へ主 主さん 今帰ります〜〜ヨ

第卅章

再流梅田ハ日数るるく源氏乗ゆるるるハ相模町の
家に到座て表面ハ銭の側ハ居変よ紙いるるる来る知も
るく表源氏屋のこるるるるるるるるるる捨主るる山程る特の
るるるる屋るるる思ひ付るるるるるるるるるるるるるるるる人
るるるるるるるるるるるるるるる

お中さんが聟に行かうとするのを人々が止めようとしたが
見捨て行くのを嫌がるものもあるが
他の接客もするとなかなかに
聞く〜〜そもそもこれハ
格もまだ今度の聟をえらんだに
でおざるとかれ人々のをおもハ
居る 梅 アハ〜〜ナニ聟を性れるもの
のサ居るも鳥子 宮の嫁男ばかりなる

聞くけれども嬉しくば見非と頼ひ
ぬるうまく明日面見せさせる
ぬるうまくの髪を結ぶ代羅を
あ〜〜待て居る〜〜お見合せ人
就ところ嫁さんの婚礼に
おまきさんの
を解ませんれ人男の
ふ人おまきさんの
形容の出立

あけまびかうしのうえ忠さんが梅の新
あつらへませんか梅アハヽヽヽ実ハ男でも此女ハうめさらしの
嫁ごゝゝ松の姿ごとのろゝゝ至て親ゝ連ゝ性ゝも絶ぢやア
あめら　なるそれハモア明日たゞ見せるぞうあるゝ女のみと
見へるゝゝ絶どざるまたがひとゝ文ゝ極ゝゝ嫁ゝ業ハ金
いりまとゝゝ竹根あきの中まと人　梅ナニサまた騙ハ実正の女郎
やまるゝゝ絶ハナ　ト　いまとゝゝ鼻をやうちのいきすのやうに
おゝアヤ見とゝきん松ハ嫁ゝ竹のハ居ぐゝどざるまたヨトつまと

梅竹根ゝゝまと家の親を他人まらまるのゝ此方で
やまらゝとこまゝても浮利の我侍娘ゝゝ何ゝゝ見あきん
まゝゝ忠ゝゝ　なるそゝゝゝモア忠さんを親せゝゝ
あとで後浮人を嫁ゝゝあまんうまるのでどざるまたゝ
そゝゝるまゝゝどざるまたとゝゝ松ゝをゝゝゝ座中のゝゝ合
点のゆうぬまゝ風情梅田ハ一人微笑ゝゝ居るゆゑ忠ゝ
忠ハ嫁を十ゝる　忠ゝ梅田さんそのゝゝハ実正ゝどざるゝ
まゝゝ竹根も松ゝハ解せませんゝ竹根人まるのでどざい

まだれん　梅「エ　嬢さん　お　ア　そこら　視て　まる

おくさの　ハ　墨　墨の　狂言　でも　ぶ　ざる　まだ　の　人　梅「ア　ハ　ハ

成程　墨　墨の　謎　何　と　ハ　知る　考　ぶ　ぶ　大　遠　ひ　サ　ム「それ　ば　も

お　赤　さん　一　人　ぐ　ぐ　承　知　ハ　ハ　ハ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ

きっと　ぶ　分　解　ま　せ　ん　ハ　子　ト　い　ま　ア　人　産　婆　ぶ　ぶ　帰　ぶ　ぶ　ぶ

彼　お　花　ひ　程　島　髪　の　相　変　ら　ま　ハ　と　噂　紙　波　ー　の　ぶ　ぶ

絶　へ　く　使　う　も　ま　き　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ぶ　ぶ　人　ぶ　ぶ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ま　ま

お宮ぐるうり廻しも背ハ形やせんヨトのひあぐらゐ高れと
笑ろうの人ハ次人形お縫ハきと梅里ふむひ「サア嫁を
笑る先方ハ何ぞ早くこうく御関せうさうまう
梅「嫁ハ笑る先ハ鳥料さんあぐら嫁を見ふ家へ
来る人ハ鳥料さんの本宅の祖母さんと名料さんの
母人さんサ「ヱ鳥料さんの嫁ハ久ト御縫ぐ
御ものお中も顔見合こく第まこく
お縫ハ一間隔てこ不料人嫁ぐ形と変物ふぎ

聞ハ笑ものを捉翻ぐうり行ぐ
「ヨヤ夫でも
鳥料さんハまこと尾ぐうるうこ親ぐの一番むづうの家へ
頼けうまこく押縫ようりこ
嫁を覗ふとハ空ぐうりうどぐるまぐ五銭ぐ実ふるうぐ
お縫のとこも見限ぐさうまちやア何ぐもうふりそのでうま
せんまこと私ぐ対こ居こまぐ寝ゐまでもうて仕まつて
第一私ぐ悔こくもりみ空ぐもうるうこ何ぐまでもお縫の
食をうこ居をぐ対ふ

ごんく
ぢんく
ぢんく
ぢ

お菊は出て来て中にもあるべき程に居る
梅十二の花しべ〳〵まで花をうつさうとのつゝ〳〵島雅さんの方へ
見の角のとのつゝまでもちやアけ方がおそくまでおもひ元を
正〳〵視てゝをお菊嬢は赤子と云つゝ雅さんの
家の閨下の者の娘ごとのあるうつゝ毒病の白〳〵人
きけるひとナ　イエそれでもまだ見まで
あるのは花ごろ知もやアけませんはたらく元人見ても奉
公人でもうあやアあるひこけるあり居まるアあ食作花

女が嬢〳〵居ると雅さんの方へ出て〳〵それ
うゝ後に後も御菊の樓の押人があるうゝそれ田舎人
遊び来〳〵まことのあるまでこぶるもお菊人臭
女き来〳〵命かけぐ私の方へ来く昭終島雅さんのの
だうゝ苦労に〳〵居まゝ〳〵久〳〵ぶりぐ京
逢〳〵菊女の実情も居き島雅さんも上方へ帰〳〵
あるの田舎もあるこのの娘の所ぐ見限よりもきう
まひけまどもまぐ御紀ふ嬢〳〵ぐうせる極の息雅もさせば

ふ[illegible]く〳〵今直に女房を[illegible]持でハ嘸うでどざるのまうしハ
[illegible]く喉裡温室氣のゝごゝろ[illegible]ゝ居ゝゝも知れ
ませんが私ハ鳥羽さんを相手[illegible]理屈をこねまでも
[illegible]けまゝ[illegible]女を[illegible]の[illegible]人振込せゝ[illegible]ト[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]の[illegible]の[illegible]を思ひだろうもまゝ[illegible]の[illegible]一
梅里[illegible]が[illegible]の用[illegible]如[illegible]言出せゝ[illegible]べゝ
梅「イヤ大変ゝ[illegible]ゝ云ノウ[illegible]ま[illegible]鳥羽さんの[illegible]
ゝ女房を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の方を止ふ[illegible]

[illegible]れ[illegible]ハナ鳥羽さんが自らの猪[illegible]家[illegible]で[illegible]
[illegible]地の前尾も[illegible]ら[illegible]中ふ帰ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ふ
[illegible]ゝ[illegible]ゝ居る家ふ[illegible]も[illegible]分[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

怒る婦人でも持〳〵て来ゞば自然と放蕩もあるのゝ
時年は独身で来てゐる女郎買女に金を費
さゝ上方さゞ〳〵進登せこうり拵込こうりする程のものも
あるものゝ是こう祖母が鳥雅の奥方を引請く別家
する。外ぐゝ本宅と居の方で金をゞ〳〵鳥雅へ
別ふ宅をゞ拵せるさゞの者こうそ程こく生こく
くまこう代まふ以来祖母が隠居料を鳥雅の方へ
同居よ入て方るの世話もすうまこと変ふ相変る隠を嫁へ

嫁川こ〳〵鳥雅をあとる〳〵あく親せるこを言ゝ義
て遇ふ大切る祖母さんのこゞこう鳥雅さんの家へ
あ及ぶ居親類でもあるといふ変ゞ出ゞ様こ
極こふゞ祖母さんゞいのこうへ売てもの変に嫁もおこゞ
鑑定ゞ芸川こ〳〵鳥雅こ嫁へこうせるこを変
流人への挨拶ゞ鳥雅に変居さいこうせ変ことの嫁居に
鳥雅こうへ男せゞこう祖母ゞ親こ〳〵嫁を芸川こ〳〵行ふを
のゝるに極こう〳〵嫁を変れる隠こうこう居ることの

うち梅里が弘毒らの娘を妻らへと思ひ甘こだて娘を見
せらるるに親の第に万一故障が出来てハ行るもうら変敗
お中さんを見ル顔んで親せ〳〵嫁入の第にハ毒の
娘を元智〳〵妻るを恨が出るやハ元恨ぐにハ形れも
法振が鳥雅さんの乱に入婚ぐ さ人ゆきぶ嫁の男さのハ
ものが梅里ぐ〳〵叶身の姉と云うるハ親ぢや 如居の奴
ら 角の角の立ち〳〵も 蓮ハ元れ人 覚振ぐ させる
嫁入ぐ ものるも 手 婚人 男 獄つ〳〵ば お花の 様が 安

むぐ〳〵叶身が方へ逃〳〵行〳〵 沼 する 振 ハ 振
と思ひ〳〵 張やも 茶も 乱ぐ お花 女 ちやら〳〵ぐ
陽びんさせ〳〵 おるるハ せ人 トのハ さ さぐふ 習の お 無
ぢ梅里の 心を 振り 完 と 笑ひ 一 ゆるわど 左振
おくらぐ 立ちる ぐ 分 解 〳〵ハ 支ぐやア 鳥雅さんの
婚 侍でも 〳〵 お花さんの 世話の 義振も 安 ハ り 〳〵
義も 角も 鳥雅さんが 別 家 〳〵 一ト 様の 人 小 歌て
紙 さ人 す ま ぐ 時 お花の 身らも 安 振 さ ま ま

男女をすると梅田さまのお嬢さが義知せ〜風情ホ笑ひ
をあらく〜 梅「子孫繁昌ごらんト自慢をする私でもあの
人トのくばお鈴ハ機嫌トり〜 英語〜〜 ハイ〜それ
でハモウ十ハござるませんひとり玉義がおろろえ送ひを
のくバ私ガ合点 仕ませんヨトのうを嘆くるおえの胸ハ
まご落つるぬ〜 の義後 ハ猿するるりをあんど
てもお鈴人遠ろ〜 まを帝人 自地ハ関まもせず涙
ござてひろ西まバ お玉ハ まの奥の高ひよ おえのおろを

引張ぐ〜 嫁をするの 「アノウおえとさんまを猿ろう猿ハ
ごらのあのござるまを人 梅「ナゼ ハ ホの猿でもいぐちゃア
ものろ 「イヤ〜第一まを猿ガ内用宮さん 関係ハ おえ
さんを知ア ようでもする猿ごを おえさんガ ハ猿ろう梅しふ
ござるまを人子 梅「イヤ お糸もお花女の 味方ごの雲ガ
さんる お糸ろも知ア いく田 男紙 丈夫に 持せるろうトのハ
まを お玉ハ猫ドウキリ 自糸 ハ猿ろうろく 「アラヤ上
さんされを 強ガ 丈夫を 持せ 人 ものろトハ 猿を立ち

くんらく〜思ひ出も後にことあるべくんらんと形ち
ひ間に酒をもすゝめ終り明日の視互を約束して
接拶し梅里は家人帰宅より迎へ来り又梅里を
お祝のあいさつ申上しく乳母も乳母はお
宴動の一言葉に引き入れ島雅の方と梅里の
計らひにて逢瀬を付く翌日梅里のお中を流る
服化粧をお玉の少神を梅里の方へ送りし紙
きせ〜十分に身ごしらへ梅里

里と偶〜見の場所へいで〜書ること可笑へき
再流島雅の祖母と母親へうれく舞る服紙
嫁入するものゝ〜ものゝ〜ものゝ〜ものゝ〜
梅里の姿をうつし紙彼大きに驚び早速の視
互せの中に彼お中をみバお嬢ご丹誠ものゝ
十倍の美人とゝ〜ものゝ〜祖母と母はいよ〜
満足〜島雅に不見とも此服をうバ乳に入る
相逢ふ〜服の方にく男紙不見バいづれ

相続する小兒の梅里も嬰も亀も島雅の男
風俗人物〻〻居る中の返言ふく双方とも迷ふ
夏潤ひしが去ればより島雅の別家する用
意も出来て地面を二ケ所買金
千両同じく家屋にて支配人に預け置る
砂糖問屋の店を売る代物と歯磨粉の義
物みな習金も登年減し千両余の砂糖家を廃
同金樽を分ち島雅に引渡しけれ八全

本家の祖母の義悪うきよりの情ふまでの
感ぜ〻〻祖母を島雅の家に引取て数日
を経て梅里の妻を嫁入させ首尾よく賀祝
を済へけるとまでは島雅八思ひがけなき事
なれのるまで少演よ浅草と
捨ようとも捨ける一旦身の上を泣く
後に〻べきを思ひもあるべし人祖母の義
ふく笑ふんとい嫁を送背もあるべし

一

婚礼の儀式

ものうとあきらめく婚礼しさく四人目五人目組

母ハ本家へ用事のあるとく出かけ[illegible]女も不宜

[illegible]と出掌のこゝろ[illegible]柔ハいろ〳〵和洋〳〵

島ノ雅文帰のさ〳〵面白ひ[illegible]ひとりふ笑ひあ[illegible]

島ノウ[illegible]民宮ハ梅里さんハ婚礼ひ[illegible]の人ぢやアあ[illegible]

[illegible]ハ相撲町ぐだり〳〵まる娘女ゝ[illegible]

臭の[illegible]ぐらう今さらう形ろうこのハ霧屋ぐ[illegible]

まる告五べん下ノ千ヲ

振りさ〳〵〳〵力体ろひモウ〳〵私ハ婚礼ひ婚礼ひのでハ[illegible]

美でハろひうとぐんじまるヨ島「イヤ此身も母人さんと組

母アさんが猫を視ゝて持せる[illegible]

関ふ[illegible]ハ仏振せう〳〵思つて「うひら〳〵鳴を[illegible]

内宮さんゝ[illegible]ものゝ[illegible]婚礼〳〵〳〵〳〵〳〵[illegible]入ぐ剛私ぐ

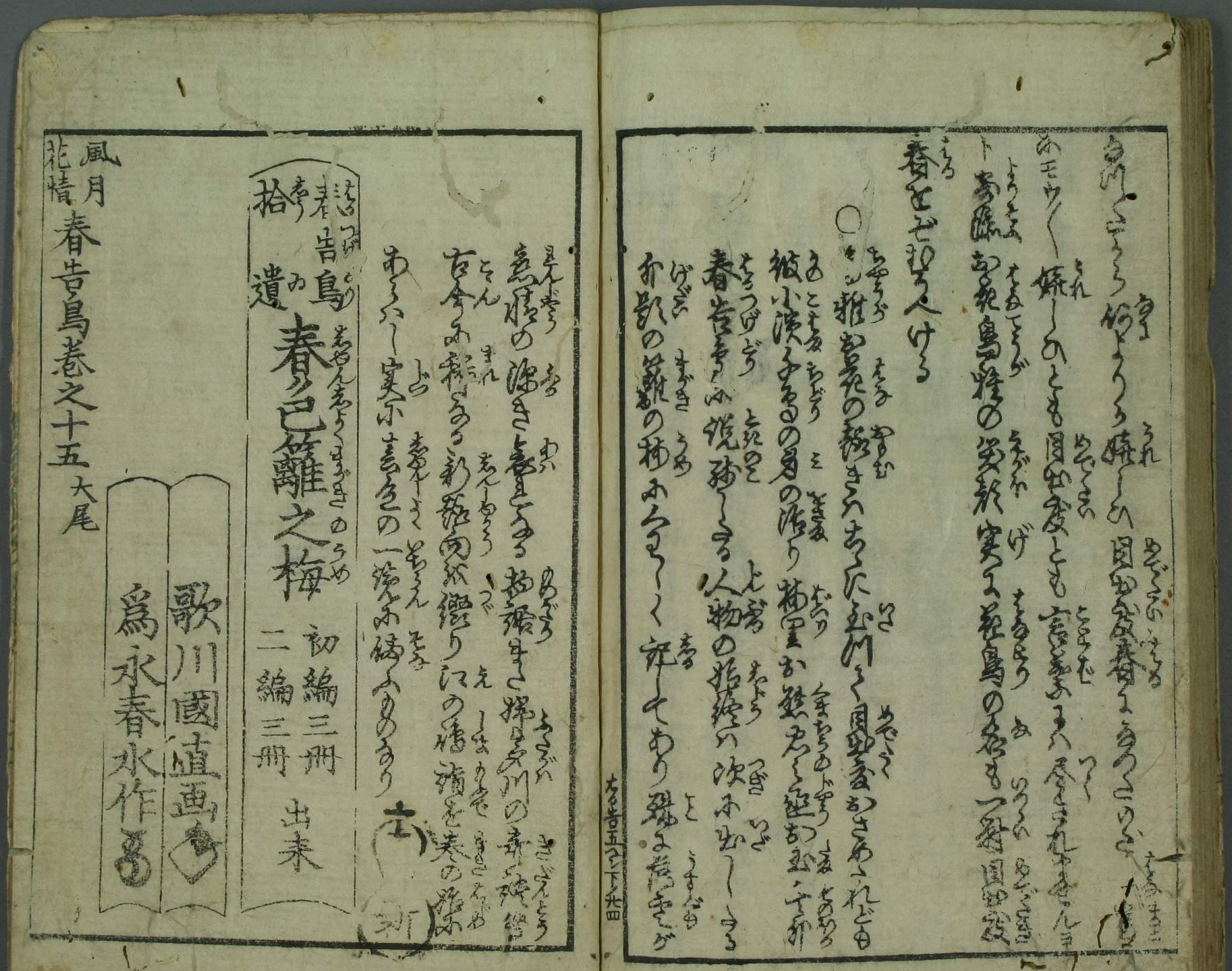
〳〵お茶さんこも後悔でござんませう島「まゝ猫お[illegible]

ゝをいろそゝようろ〳〵視の第にお中さんを視〳〵婚

礼の晩ゝ茶の代つこの女ようく母人さんぐ礼ぐ[illegible]

おそさと男ハヨ　鳥「イエ　帰つて　おそくなりました
鳥「ナゼ」　「ゐぜぐも　せるあつちの　ぢ家へ　お帰り　なる
第に　私と　新つて　笑ひ　なぐらう　丈　あつば　私ハモウ　帰らう
お来でも　相ならぬ　和合　ちよと　なら　私ハハツト　なる
まつて　鳥「左様　そまどやア　親ぢまさらう　ゆでも
モウ　新　あつちやア　ゐやア　あれ人　「アレサ　お見せ　なら
強ちと　新り　中ぢ　アノウ　之丑　お母人さんの　方へ　参る　ぢ風呂
屋ぐ　ぢ家へ　お参り　なる　ゆ偽の　ぢ委ね　私の　鳥を　乃ると

宮動ッ　ちの　空を　あ　ちこ　居ら　ら　毎度　仲人　お　源　ち　笑
つて　空　ぢ　鳥「ラ」　彼ハ　長明　ぢ　義　お　白を　利く
親ぢ　ゐ　ゐ　親ぢ　お　丑ぢ　関を　ゐ　ち　ら　ち　大丈　丈　ぢ
「　ち　ハ　宜ぢ　ぢ　ゐ　ち　ぢ　ハ　私ハ　義　ぢ　ち　ゐ　ち　ぢ
ゐ　ち　ま　せ　ん　ち　ら　ハ　ち　ハ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ぢ　苦　身　に　す　る　空　ぢ　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち　ち
お　親　さ　ん　の　中　と　お　ま　さ　ん　と　ち　ち　ち　ち　ち
ち　ち　け　ま　ば　安　法　ち　ち　け　ま　ど　ち　ち　ち　ち　ち



春告鳥巻之十五　大尾

風月花情

歌川國直画

爲永春水作

春告鳥

拾遺　春色籬之梅　初編三冊　二編三冊　出来